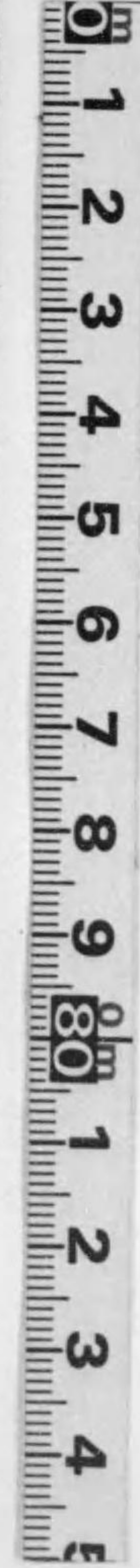


327

904

学書経歴談

国立国会図書館



始



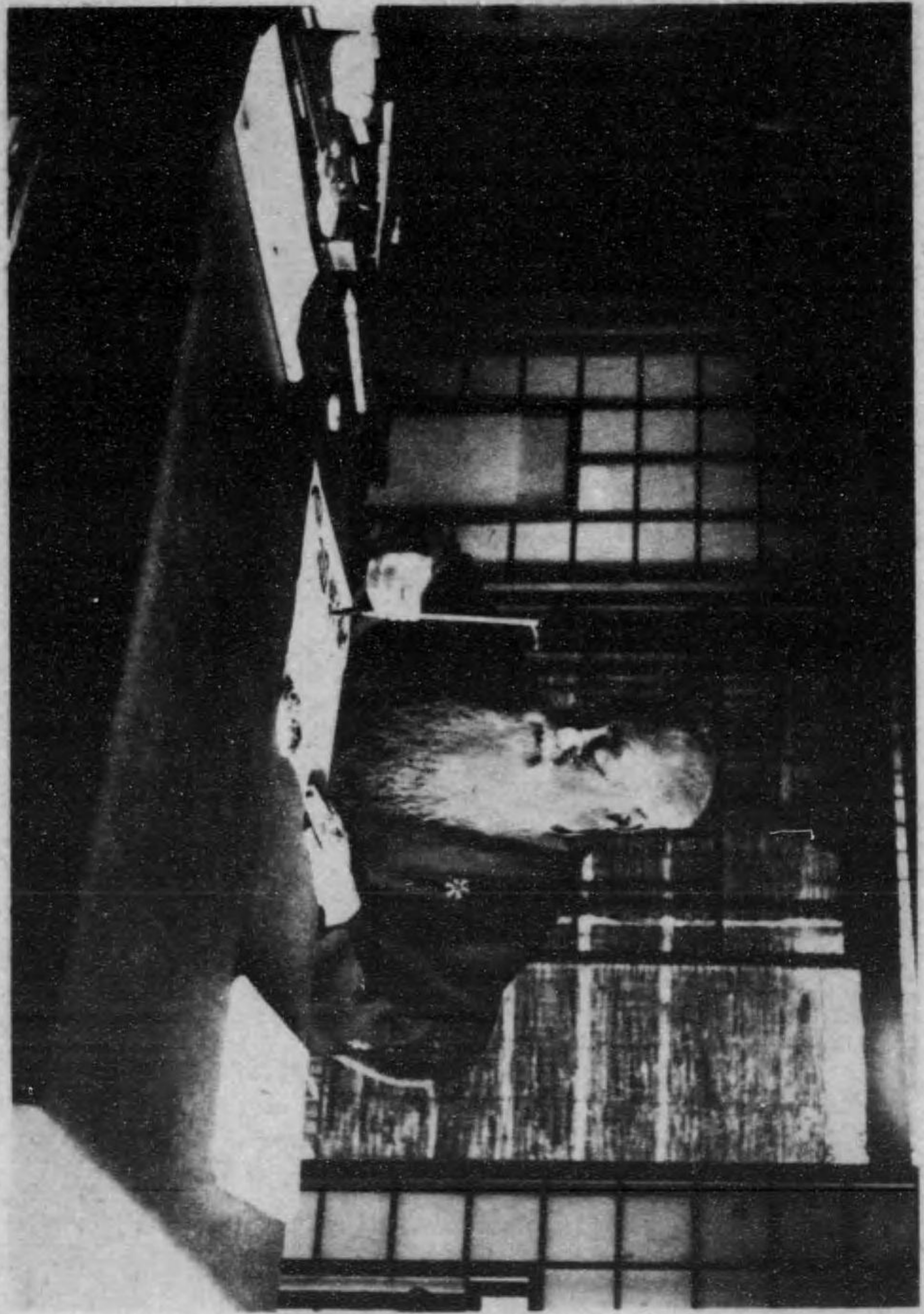
2771154

327

904

鳴鶴先生學書經歷談

門人 馮
晉 齋 出



327-904



心



匹

筆

正

空
坡
月
岩



大正
5. 11. 29
内交

心

匹

筆

正

空
坡
月
岩





起首先ッ古人ノ
語ヲ揭テ學書ノ
甚難ヲ證ス

世人ノ諺ニ梅檀
ハ二葉カラト信
ニ然リ

學書經歷談

鳴鶴仙史述

一六居士評

古人ノ書論ニ書ヲ學フハ舟ニ棹サシテ急流
ニ溯ルカ如クガヲ用ヒ盡シテ故處ヲ不離ト
アリマシテ實ニ書ハ小道ト雖モ其進ミ難ク
シテ退キ易キヤ知ル可シテアリマス私ハ幼
時ヨリ天性文字ヲ書クヲ好ミマシタカ其
頃郷里ニハ名アル書家トテモ無ク些ノ師傳

學書經歷談

霧中ニ彷徨シ望
洋ノ歎ヲ起セシ
ハ即是今日藝林
ニ雄視セラレ、
ノ根本

ヲモ得スシテ。只管種々ノ書ヲ習ヒマシタカ。
更ニ其道ヲ得ルコト出来ス。今日ヨリ顧レハ。
實ニ無益ノ事ニ多クノ日月ヲ費シマシタ。
廿四歳ノ時。藩用テ初テ京都へ出マシテ。寺町
邊ノ書林テ墨帖碑版ナトヲ少々購ヒ。暇ヲ偷
ミテ學ヒマシタカ。未タ良師ニハ遇ハス一向
書法ノ端緒カ分リマセンカラ。只五里霧中ニ
彷徨シ。常ニ望洋ノ歎ヲ發シ。幾度カ筆ヲ抛チ
テ寧ソ書學ヲ止メヤウカト思ヒマシタカ。其

不撓不屈ノ四字
實ニ成業ノ無上
上咒

酒ヲ蘭亭ニ供ス
ル古來未曾有ノ
事仙史ノ志ヲ當
時ニ立ツル既ニ
確然タル可知ナ
リ

後フト心ニ感スル事カ有リマシテ。大ニ奮發
シ。我書ニ於ル深ク之ヲ好ムノ性質アリ。而ル
ニ學ノ成ラサルハ。我カ志ノ近小ナル爲メ也。
不撓不屈ノ精神ヲ以テ。篤ク之ヲ學ヒ數十年
後ヲ期シテ人後ニ落チサルノ書トナラント。
遠大ナル希望ヲ興シマシタノハ。私カ廿五歳
ノ暮ノ事テ。實ハ竊ニ王右軍ノ蘭亭帖ニ酒ヲ
供ヘテ。我志ヲ誓タ事カアリマシタ。
其當時京都ニハ貫名海屋先生カ晚年生存ノ

當時余モ亦同感
ナリ但シ余ハ仙
史ニ比シテ年齒
稍長スルヲ以テ
海屋先生ニハ度
々面會モシタレ
凡遂ニ書法ヲ問
ヒタルヲナシ遺
憾千萬々々々々

學書經歷談

時テアリマシタカ。慚カシイコニハ此方ノ眼
カマタ卑イモノテスカラ。眼前大家先生ノ書
カ目ニ入ラス。此ハ如キキタナイ反古紙ノ様
ナ文字ニ人カ潤筆ヲ出スハ實ニ可笑シイ事
タト思フテ居リマシテ。一度モ貫名先生ヲ訪
ハス。兩三年ヲ過キテ我眼モ幾分力進ミ。先生
ノ書法ノ妙モ稍分リマシタ頃ニハ。既ニ故人
ノ籍ニ入ラレタト申ス次第テ遺憾ニ堪ヘヌ
所カラ。其門人等ニ就テ先生カ門弟子ニ對シ

識見既ニ定マル
進境期ス可キノ

學書經歷談

テノ教授方。即チ執筆用筆結字等ノ法ヲ始メ
其他種々ノ事ヲ問ヒ試ミマシタニ。其答フル
所人々異同有ツテ一樣ナラス。依テ自ラ考案
ヲ立テ。其每人異ナルノ說ハ。其人々ノ性ニ隨
テ授ケシ所。其每人同シキモノハ定法トシテ
何人ニモ授ケシモノト臆斷ヲ下タシ。是レヲ
以テ學書ノ楷梯トナシ。怠ラス研究ヲ勉メタ
結果。漸ク書法ノ筋路カ雲霧模糊ノ間ニ髣髴
ト分リ。始テ端緒ニ就キマシタハ三十歲位ノ

時テアリマシタ。

貫名先生ハ多ク歴代ノ碑帖ヲ收集シ。其考證ニ委シキ人テ有リマスカ。中ニ就キ集帖ヲ好マス。主トシテ原碑ニ力ヲ用ヒラレタト聞キマシタ。其理由ハ集帖ハ幾度カ重刻ヲ經テ古人ノ精神形似共ニ失フタモノ多クシテ。到底信ヲ置カレマセン。原碑ハソレニ反シテ千百年ヲ經ルト雖モ。古人ノ眞蹟ヲ直ニ石ニ刻シ。僅ニ一紙ヲ隔テタハカリ。磨泐ノ餘ト雖モ。精

先生眼高キ。此ノ如シ其ノ書ノ高キ所以ナリ

神未タ全ク盡キス。打モタレテ學フニ足ル故テアリマス。此事ヲ聞キ得マシテ深ク其理ニ服シ。夫ヨリ私モ亦支那歴代ノ碑ヲ研磨スルコトヲ始メマシタ。明治元年余カ東京ニ來リシ以來。力ヲ盡シテ碑帖ヲ收集シ。專ラ書法ノ研究ヲ爲スコトヲ得ルニ至リマシタモ。其本ヲ尋ヌレハ貫名先生ノ說ニ基キ。其學ヒシ所以ヲ學ヒタル事テアリマス。

我朝千年ノ昔シニハ唐ノ名家ニモ劣ラヌ名

人カ輩出シ。其眞蹟ノ今ニ尙存在スル者少カ
 ラス。是等ニ就テノ講究モ致シマシタカ。第一
 南都正倉院寶庫ノ諸眞蹟ヲ始メ。空海・逸勢・道
 風・佐理・行成ナトノ劇蹟。及和銅天平年代ヨリ
 弘仁・天長前後ニ至ル經生ノ古寫經等ヲ。或ハ
 緇紳家好古家ニ就キ。或ハ古寺名刹ニ依リ。種
 々ノ手續キヲ求メ。又ハ坊主ニ鼻藥ヲ遣シタ
 リシテ。大略之ヲ閱覽シ。千古眞蹟ノ妙趣ヲ玩
 味シ。之ヲ支那古代ノ原碑ニ合セ見テ。大ニ啓

唐太宗ノ辨才ニ
 於ケルト一般ノ
 手段
 進境一層

發シタ事モアリマシタ。

唐ノ遜過庭ノ書譜ノ古帖カ。何レノ頃ヨリカ
 我邦ニ二帖傳來シテアリマシテ。其一本ハ伊
 藤東涯先生ノ舊藏ニテ。今ニ堀川ノ伊藤氏ニ
 傳ハリ。又一本ハ貫名先生ノ舊藏ニ係ル者テ
 アリマス。帖尾ニ元祐二年河東薛氏摹刻トア
 リマシテ。眞ニ宋刻宋搨今日支那ニモ多ク得
 難キ名帖テアリマス。右貫名本カ明治八九年
 ノ頃。余カ手ニ歸シ。大ニ之ニ力ヲ用ヒ。嘗ニ草

此帖先生沒後山
 田翠岳ノ手ニ歸
 セシカ仙史一見
 此ニ易ユルニ愛
 藏ノ古搨停雲館
 全帖ヲ以テセリ
 當時余甚タ其不
 當ナルヲ怪ム今
 ニシテ仙史ノ眼

孔炬ノ如キニ服
ス
進境一層

仙史ノ楊氏ヲ震
館公署ニ訪フ余
亦同ク往ク楊氏
歡迎其所齋ノ古
碑搨本數百種ヲ
出シ觀セシム欣
賞時ヲ移ス爾後
往來相親ミ其收
藏ヲ見其論說ヲ
聞キ得益甚多シ

法ヲ得ルノミナラス。諸體ニ通シ悟入スル所
カアリマシテ。一段ノ進境ヲ得マシタ。
明治十二三年ノ頃。楊守敬ト云支那人カ公使
館ノ隨員トナツテ渡來シマシタカ。此人ハ支
那ニテ所謂金石學者ニシテ。歷代ノ碑帖ノ學
ニ長シ。并ニ書法ニ委シキ學者テアリマシテ。
周ヨリ元ニ至ル歷代ノ碑本。凡ソ一萬二三千。
其他各種ノ墨帖ヲ殆ント網羅シテ携帶シテ
居リマシテ。從來我邦へ舶齎シタルモノハ其

此刻苦アリ其學
ノ進ム固ヨリ宜
ナリ矣

ノ百分ノ一ニモ足リマセヌ。實ニ再ヒ遇ヒ難
キノ時ト思ヒ。一々乞フテ借覽シ。古今年代ノ
順序ヲ追ヒ。每碑時代年月書體撰文書丹人名
及所在地名等ヲ列記シ。一萬有餘種ノ碑版目
録ヲ編纂スルニ。殆ント五ケ年ハ日月ヲ費シ
テ漸ク脱稿ニ至リマシタ。此ニ於テ始メテ支
那歷代ノ書法ノ沿革。即チ大小二篆古隸八分
楷行草ト各種ノ書體カ。時世ト共ニ推移リ。一
代々々ニ書風ノ變化シタル趨勢カ。恰モ地層

進境一層

學書經歷談
十二
ノ、縞目ヲ見ルカ如クニ明瞭ニナリ。胸中ノ雲霧カ漸クニ晴レテ疑ハシイ事カアラ方無クナリマシタ。

支那ノ下手ハ下
手中ニ一種ノ風
致アリ我邦ノ下
手ハ唐様ニ似タ
ト云モノ多シ

明治廿四年支那ニ一遊シ。彼我兩國ノ書風ノ異同ヲ講究シテ見マスルニ。概シテ彼カ書ハ沈着渾厚。我ノ書ハ流滑纖麗ニシテ。自ラ書風ノ上ニ大陸ト一島國ノ氣象ヲ顯ハスカ如ク。中心慨歎ニ堪ヘヌ思ヒテアリマシタ。ソレカラ蘇州ニ到リ。吳大徵ニ交リ。殷周秦漢ノ古器

確言名言簡而盡
矣

進境一層

銘ヲ多々見ルコトヲ得テ。三千年外大小二篆ノ高妙ヲ窺ヒ。又楊見山ニ遇フテ。漢隸ノ法度ヲ聞キ。篆ハ圓勁古雅。隸ハ方勁古拙ヲ以テ極致ト爲ストヲ悟リ。唐隸明隸ノ判然途ヲ殊ニシテ。學フニ足ラサルヲ知り。又從來我邦人ノ篆隸ニ一モ古法ナク。皆優孟ノ衣冠ナルコトヲ看破スルニ隨ヒ。深ク自ラ戒ムヘキ所以ヲ知り得マシタ。實ニ此行ハ私カ爲ニ一大有益ノ事テアリマシタ。

古來我邦ノ書ハ。空海逸勢ノ二家カ。唐ヨリ傳來以後。近代ノ御家流ニ至ルマテ。種々ノ沿革ハ有リマスカ。要スルニ一種嫵媚圓滑ノ習氣カアル。即チ俗ニ所謂和習ト云モノテアリマス。唐代ニハ書ノ名人カ輩出シテ。遙ニ後代ヨリ勝レテ居リマスカ。書ヲ以テ人ヲ取ツタ爲メ段々規則繁縟ニナリ。其中世以後ニ至リマシテハ。大ニ圓熟齊整ノ習氣ヲ生セシハ勢ヒノ免レザル流弊デアリマス。空海逸勢ナトハ

我邦書法ノ沿革
ヲ論シ一々肯綮
ニ中ル敬服々々

唐ノ名家ニモ拮抗スヘキ名手テハアリマス。カ。後世其末流ニ至リ甚タ俗氣ヲ生シタハ。幾分カ唐ノ中葉以後ノ習氣ヲ遺傳シタ者テハアルマイカ。又ハ我邦ニテハ其後千年以來唐ノ範圍ニ圍セラレテ。滔々下流ヲ逐ヒ。古ニ溯リテ本源ニ回ルヲ知ラス。加ルニ假名ノ流滑ナル文字カ盛ニ行ハレシヨリ。不知不識此弊ヲ生シ。歲月ノ久シキ習フテ性トナリシ者テハ無カラウカト思ハレマス。是ヲ以テ私ハ常

方今能ク此遺傳
病ヲ免ル、者幾
人カアル

俗士動モスレハ
霸氣アリト云ヒ
魔道ニ陷ルナト
、云フ而シテ其
喜フ所ノ書ヲ見

ルニ淳化ノ化物
ナラチハ星鳳ノ
幽靈ナリ噫

學書經歷談

十六

ニ深ク注意シテ。此遺傳病ヲ避クル工夫ヲ怠
リマセン。

唐以前六朝時代ノ碑ニハ。唐碑ニ勝ルモノカ
澤山アリマスカ。從來我邦ニハ更ニ分ラスニ
居リマシタ。然ルニ楊守敬渡來後。始メテ此事
カ明ラカニナリマシタ。故ニ秦漢ノ篆隸及六
朝楷書ノ法ナトヲ研究シテ世間ニ傳播スル
事ヲ勉メマシタカ。其頃世間テハ日下部ハ怪
シイ字ヲ書キ出シタ。魔道ニ陷チキツタナト

ハ、ハ誹リヲ招ネキ。或ル二三ノ友人ヨリ忠告
ヲ受タ事モアリマシタカ。私ハ彼等カ知ル所
ニ非スト無頓着ニ黙シテヤリ通シマシタ。漸
ク近年ニ至リ世人モ漢隸トカ。六朝トカ云ヒ
出シテ來マシタカ。尙ホ今日テモ世上ニ學者
トカ書家トカ稱セラル、人ニシテ。唐ニ偏重
スルノ舊習ヲ脱セス。六朝ノ書ハ妖怪ノ如ク
思フ輩モ多クアリマス。此輩ハ先入主トナリ。
心カ一方ニ偏スルヨリ。公平ナル見識ヲ持ツ

一ノ出來ナイノハ全ク見聞ノ狹キニ坐セラ
 ル、爲メテアリマス。支那歷代ノ書ヲ通觀ス
 ルニ概シテ今ハ古ニ不及ノ傾キハ有リマス
 カ。去ナカラ元來人ノ能力ニ於テ。古今甚シキ
 懸隔ノアル筈ハアリマセン。近人ト雖モ一代
 ノ名手トモ稱ス可キ人々ニハ。皆古人ニモ左
 迄劣ラヌ長所カ有ル。故ニ書ヲ學フニハ甚シ
 ク古今ヲ軒輊セス衆長ヲ兼有スルノ度量カ
 無クテハナリマセヌ。

名言不磨

仙史已ニ天分ヲ
 占ム之ニ加ルニ
 多聞多見ト學問
 熟練ヲ以テス藝
 林獨歩誰カ能ク

私ハ少年ノ時ヨリ篤ク書ヲ好ミ。其初メ分り
 難キ事モ種々工夫ヲ重ネ。必ス會得スルニ至
 ラサレハ已マヌト云フ力ハ持テ居リマシタ。
 之レハ我カ天分テアラウト思ヒマス。去リナ
 カラ假令ヘ天分カ有テモ。多ク古人ノ書ヲ見
 多ク先達ノ格言ヲ聞カサレハ。我カ心ノ疑惑
 ヲ啓キ難ク。之ニ加ルニ十分ノ熱心ヲ以テ。數
 十年怠ラス。熟練シテ始テ一家ヲ成スニ至ル
 次第テアリマス。故ニ書學ハ第一ニ天分第二

之ニ敵セン

此一段誠意正心
ニ關ス決シテ輕
々看過スベカラ
ズ

學書經歷談

二十

ニ多聞多見第三ニ學問熟練ニシテ終身ノ修業ト云フヲ忘レテハナリマセヌ。漢ノ揚子雲ノ言ニ書者心畫也。心畫形。君子小人見矣。トアリマシテ。之カ書論ノ嚆矢テ。書ノ神理ヲ一言ニ說キ破タ語テアリマス。各自内ニ在ル性情カ形質ト成テ。筆墨ノ外ニ現ル、事テアル。故ニ書ヲ學フニハ第一高尚ナル氣象ヲ具ヘサル可ラス。人品須高師法須古トハ古人ノ格言モ其爲メテアリマス。元來書ト云

者ハ。人々其面目ノアル筈ノ者ニテ。和漢古今名人ノ書ニ。一人トシテ同シキハナク。各々書風カ異ツテ居ル。羲之獻之ハ父子ナレトモ同カラス。空海逸勢道風モ皆同カラス。其他一人トシテ異ナラサル者ハナイト云フモノハ。其人々ノ性質ニ依テ然ル者テアリマス。然ラハ一定ノ規矩ハ無イカト云ヘハ。天然ノ則リニ從フテ成リ立タ所ノ萬古不易ノ法度カアル。此一定ノ法度ニ因リテ。人々其性質ハ如ク異

學書經歷談

二十一

論辯此ニ至テ妙
極マル不覺拍手
喝采ス

ナル書ヲ書キ出ス所カ。無盡藏ノ變化テアル。
譬ヘハ人ノ面ノ如ク東洋人テモ西洋人テモ。
赤道直下ノ黒奴テモ。耳目鼻口ノ位置カ。千古
萬古變セヌ所ハ。不易ノ定法。又古今何億萬ノ
人類カ。父子兄弟ト雖モ。同シ面貌無キハ窮極
ナキ變化テアル。書ノ定法ト變化モ恰モ此理
ト同様テアリマス。然ルニ世ノ中ニ。或ハ世ニ
媚ヒ。或ハ異ニ誇ルノ邪念ニ驅ラレ。心未タ規
矩ニ通セスシテ。漫リニ變化ヲ求メ。其弊遂ニ

益論シテ益快ナ
リ

全篇ノ要旨ヲ包
括シテ丁寧反覆
ニ説盡ス何等ノ
心切何等ノ著明

輕佻虛偽ニ非レハ。板俗無精神ノ邪路ニ陥キ
ル者カ間々アリマス。取リモ直サス人ノ面ニ
目カ三ツ著タリ。鼻カ横ニナツタリシテハ。人
類ニ非スシテ即妖怪トナリ。又生キ人形ハ四
肢五體。人ニ異ナラサレ共。靈妙ノ精神ナケレ
ハ。作爲ノ死物タルト一般テアリマス。故ニ書
ヲ學フニハ。讀書學問ヲ爲シテ。我志ヲ高尚ナ
ラシメ。古今名人ノ眞蹟碑帖類ヲ多ク見多ク
學ヒ。又先達ノ格言ヲ多ク聞キ。十二分ノ精神

ヲ振作シテ數十年ノ工カヲ積メハ書ノ源流
 法度傳習ノ異同ナトカ自然ト胸臆ニ融會シ
 初テ天然ノ規矩ヲ用筆用墨ノ間ニ寓シ我カ
 氣魄ヲ以テ自在ニ運用ヲ爲シ得ルニ至リマ
 ス。是ニ於テ心靈ニ手敏ニ精神活潑知ラス識
 ラス性情流露シテ我カ一家ノ書ヲ成ス次第
 テアリマス。畢竟斯ノ道タル書者心畫也ハ一
 語ヲ擴張シテ至精至高ノ域ニ進ミ行クノ外
 ナク毫髮モ妍美取悅輕佻銜世ノ邪念カアツ

一結千鈞首尾呼
 應

テハ成リマセン。故ニ曰ク心正ケレハ筆正シ。
 鳴鶴仙史書學之邃。書法之妙。方今無匹。今此
 一席談話。四十年來刻苦勉勵實際懇懇說出。
 無復餘蘊。宜做一編書法正傳。讀仙史余益友
 也。畏友也。戊戌一月三日。

友人 巖谷修 妄評
 門人 岩佐秀 校字

大正五年十一月二十七日印刷

大正五年十一月三十日發行

學書經歷談奧附

著 權 所 有
作 權 有 所

著 作 者 日 下 部 東 作

發 行 者 葉 多 野 太 兵 衛

東京市神田區今川小路二丁目四番地

印 刷 者 仙 葉 元 太 郎

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印 刷 所 株 式 會 社 秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

東京市神田區今川小路二丁目四番地

發 行 所

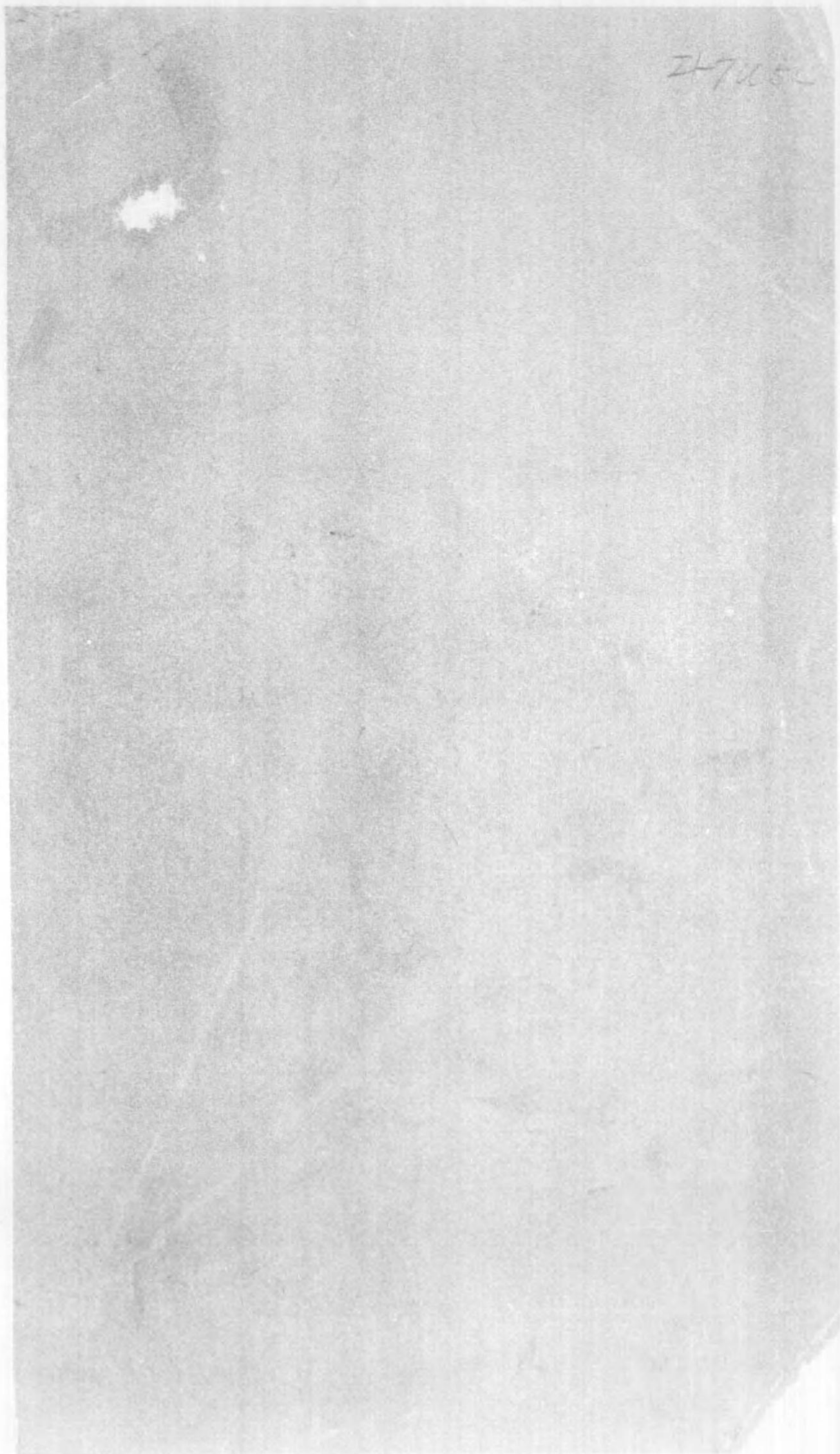
清 水 書 店

電話本局九六四番、九六五番
振替貯金口座東京七四四七番

327
904



2705



終